

船橋市本町通り商店街 きらきら夢ひろば

2003～2012

10年間のありがとう、
そして未来へ



船橋市本町通り商店街 きらきら夢ひろば
～10年間のありがとう、そして未来へ

発行日：2012年10月13日

発行者：船橋市本町通り商店街振興組合（船橋市本町 3-3-1 TEL422-7419）

NPO 法人船橋子ども劇場 / NPO 法人まちアート・夢虫 /

NPO 法人コミュニティーアート・ふなばし / 船橋に中ホールをつくる会

NPO 法人船橋レクリエーション協会 / NPO 法人ちば MD エコネット

NPO 法人100歳まで安心して買物できるまちづくりの会

NPO 法人にぎわい創生船橋駅周辺のまち / まちネット・ふなばし

(有) グッド・タイム

船橋市本町通り「きらきら夢ひろば」

主催：船橋市本町通り商店街振興組合

NPO 法人船橋子ども劇場

NPO 法人まちアート・夢虫

NPO 法人コミュニティーアート・ふなばし

船橋に中ホールをつくる会

NPO 法人船橋レクリエーション協会

NPO 法人ちば MD エコネット

NPO 法人 100 歳まで安心して買物できるまちづくりの会

NPO 法人にぎわい創生船橋駅周辺のまち

まちネット・ふなばし

(有)グッド・タイム

共催：宮下サービスセンター

後援：船橋市／船橋市教育委員会

そこは、 「きらきら 夢ひろば」

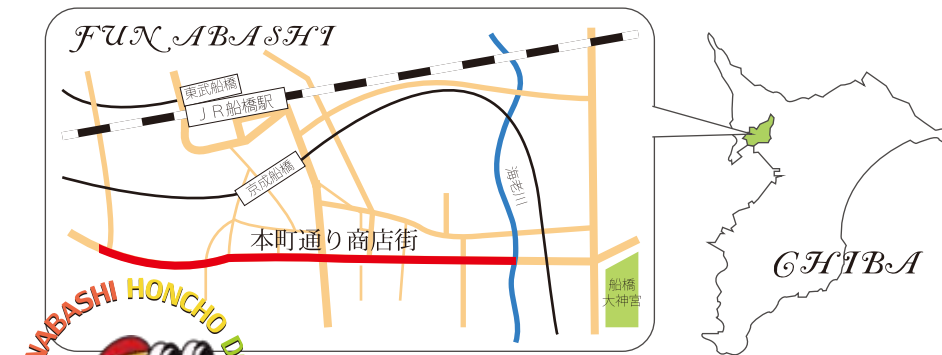
船橋は、人口60万人を擁する、歴史ある街です。本町通り商店街は、その中心に位置し、意富比神社（おおひじんじや）・通称船橋大神宮をはじめ、多くの寺社に囲まれるとともに、成田参詣の要所として栄えてきました。

「きらゆめ」の愛称で親しまれている、船橋市本町通り商店街「きらきら夢ひろば」は、船橋市本町通り商店街振興組合と地元NPOの協働による地域づくりイベントとして、2003年に始まり、2010年に10周年を迎えました。

「きらゆめ」は、毎年春・秋の2回開催され、200名を超える出演者・ボランティアスタッフが活動し、船橋幼稚園、船橋小学校近隣5校の小中学校からの参加があり、近接する中央公民館とも連携するなど、地域づくりのプラットフォームとなっています。

毎回、きらゆめの最後に行われるスタンプラリー抽選会。舞浜リゾートチケットのほか、お菓子やドリンクが大箱で当たる豪華な振る舞いが楽しみで、みな最後まで帰らずに集まって来る。

ダイヤモンドポイント会のホームページアドレスは…<http://www.diamond-service.jp/>



40年以上の歴史をもつ船橋市本町通りダイヤモンドポイント会。シール事業としてスタートした当時、本物のダイヤモンドが当たることからその名がつけられた。今では積み上げられたポイントを使って買い物をすると「ボランティアポイント」が積み立てられる仕組みになっており、「きらゆめ」を支えるNPO等の活動に役立てられている。

ダイヤモンド会の人気キャラ「ダボちゃん」。



旦那文化が 支えるまち



Honchodori, funabashi



「こんなことをしたい」と言う参加NPOに「まずはやってみましょう」とこたえる商店主たち。そんな関係が「きらゆめ」を生み出しました。参加者は自分たちのまちのことをよく知るようになり、さらに意欲的な提案へとつながっていき——そうした素敵なプラスの循環が、「きらゆめ」をじっくりと育ててきました。

NPO × 商店街





家族と地元で 過ごせる場所

船橋市本町通り商店街
事務局
徳光優子さん

「きらゆめ」を運営していて、手ごたえは感じますか？
徳光 はい。「きらゆめ」のお客様は、私と同世代の20〜30代のいわゆる子育て世代の方が多く、毎回たくさんの子どもの連れのお客様が多くて、びっくりしています。商店街のお客様は、ご高齢の方が多いので、本町通り商店街としても、お客様の幅が広がり、うれしいです。地域のイベントとして定着している実感があります。

「きらゆめ」の10年間で、忘れられない思い出はありますか？
徳光 初めはかなりの頃は、知名度もまったく無く、お客様が少なく、イベントなども見えてくる人がほとんどいらつしやらないものなどもあり、とても心細く感じたのが忘れられません(笑)。

「きらゆめ」を10年間支えてきて、変化などは感じますか？
徳光 それは、いろいろな場面ですが、特にスクエア21前のイベントがすっかりとして、毎回とても盛り上がるようになってきたことです。音楽教室「グッドタイム」主宰の田丸さんが機材や当日の進行などで担当してくださっていることが、とても大きいですね。自分自身としては、「きらゆめ」が始まった当初は、わからないことだらけでしたけれど、現在では、毎回行っている「クイズラリー」のチェックポイントの設定などをお子さんに安全で分かりやすくするといった部分などに意見を出力しています。

徳光さんご自身が子育て中の若いママさんですが、徳光さんから見て「きらゆめ」の魅力って何ですか？
徳光 地域で子どもとそのご家族が楽しめるという点です。無料の昔遊びコーナーや有料のワークショップなども参加費がとっても安く、ファミリーでお金をかけずに地元でゆっくり過ごすことができるイベントは貴重だと思います。あと、船橋の近隣でも、新興住宅地の住民が昔からある自治会に参加しづらいというケースが出てきていますが、「きらゆめ」は、新住民の方が地域イベントに気軽に参加

「きらゆめ」の事務局として気をつけていることはありますか？
徳光 来場してくださるお客様に、「きらゆめ」の情報を分かりやすくお伝えするということです。これは、参加NPOの皆さんにも、心がけています。

「きらゆめ」と
育つまち

「きらゆめ」が始まった頃に生まれた子は今、10歳の誕生日を迎えようとしています。そして、「きらゆめ」が始まった頃に10歳だった子は成人式を迎えます。地域とともに成長していく足取り。まちとともに育っていく「きらゆめ」。

また、次の「きらゆめ」の季節がやって来ます。

商店街全体で ライブとか、 良いですね。

船橋市本町通り商店街振興組合
事業促進委員長
関根金一郎さん

— 関根さんの子どもの頃の思い出を聞かせていただけますか？

関根 私は、船橋幼稚園↓船橋小学校↓船橋中学校と進みました。子どもの頃は、よく海老川にサリガニ釣りに行きました。そのころはまだ、護岸もされていなくて。あと、小学生の頃は学校が終わると、家で遊んでましたね。うちは酒屋で、庭が広かった。築山で遊んだり、木登りしたり。友達が集まって、(お酒の)倉庫の間にロープを張って、ターザンごっこしたり。だから、あんまり外に遊びに出かけたりはしませんでしたね。「外に行くより家！」でした。中学校に入ると、「船橋ヘルスセンター」のローラースケート場にみんなで行きました。あと、「大滝すべり」もね。
— これからの「きらゆめ」、本町通り商店街に、どのような期待を持っていらっしゃいますか？
関根 「きらゆめ」は、10年間でものすごく安定してきましたね。今後は、商店街全体でライブとか、良いですね。商店街にもっと気取らない「たまり場」のような魅力的な場所ができて良いですね。

「きらゆめ」「商店街の売り出し」
などのイベントの担当をしています。



「きらゆめ」

— 「きらゆめ」は、2012年に10年目を迎えました。振り返ってみて、一番の思い出は、どのようなことですか？
森田 始めたばかりのころは、イベントも集客も少なく、本当に心配になりました。現在では、毎回実施している「クイズラリー」の参加者がどんどん増えていて、「きらゆめ」が地域に定着している実感があります。
— 「きらゆめ」が10年間も続いている秘訣は、何でしょうか？
森田 NPOの皆さんとの会議ですね。商店街の人間だけで集まっているのは、こんなには続かなかったと思います。毎月会議をして、いろいろなことを話しているうちに、止められなくなってしまうくらい(笑)。自分たちだけでなく、外部のいろいろな方とパートナーシップを組むことが、長く続けるためのコツだと思います。10年間続けてきたおかげで、蓄積したノウハウは、とても大きいですね。
— 森田さんが考える、「船橋の魅力」って何でしょう？
森田 正直言って、自分自身も30歳くらいまでは、まちの魅力なく、考えてもいなかったし、感じていませんでした。それが、今ではまったく変わりました。「きらゆめ」のような活動が出来るのが、船橋の魅力だと思いますよ。

森田 「きらゆめ」には、毎回、障害を持った方や不登校の若者以外にも、近隣の船橋小学校・船橋中学校をはじめとした5つの学校の児童・生徒さんも参加しています。また、60代70代の方々もスタッフや出演者として活躍されています。通常なら出会う機会も少ない様々な方が、普通に「働いている」この状態は、商店街の持つ特性から来ていると思います。それは、私たち商店主は、「自分以外は、皆、お客様」という意識があることが基本となっていると思います。また、「きらゆめ」に集まってくださる方々は皆、商店街の活性化を助けてもらっているわけですので、全ての方々に感謝の気持ちを持っています。

ができることが、 船橋の魅力。

森田呉服店
森田雅巳さん



森田さんは、「きらゆめ」の立ち上げに尽力され、
お店は伝統的な建築で、まちの名所になっています。

商店街で お待ちしています！

船橋市本町通り商店街振興組合
理事長 中村正直さん

— 「きらゆめ」に期待することをお聞かせください。

中村 まずは、商店街に来てもらいたいですね。そのためには、商店街側でも、「売らんかな」だけでは、お客様に来ていただけません。「おだ話」や「名物おじさん」といった、商品以外の商店街の魅力をもっとアピールしたいですね。
— ものを売るといった以外の商店街の役割には、どんなものがあるでしょう？

中村 本町通り商店街は、「子どもの防犯」という部分も意識しています。商店街が持っている放送設備は、通り全体にアナウンスすることが出来ます。こういったインフラを、市と協力して地域のために活かしていきたいと考えています。またこの放送設備は、災害時にも活用できます。商店街は、「防犯」「防災」といった、経済的な面以外の役割も大きいんですよ。

— 商店街にはそんな役割もあるんですね。
中村 しかしこれからのことを考えると、後継者不足が心配です。本町通りにもマンションが増えて、歩道から2mのセットバックを設けていただくという要望だけで精一杯です。しかしその一方で、「きらゆめ」はたくさんのお客様、NPOの皆さん、商店街とで盛り上がりつつあります。私はこの仕事を、いつでも次の人に託すことができるようにと頑張っています。商店街の店主の皆さんには、もっと集まりに出席していただきたいと思っています。皆で集まってわいわいやること自体が良いことだし、「きらゆめ」がこれからもそんな楽しい場であって欲しいですね。



「きらゆめ」では毎回、船橋小の子どもたちにより
まちアート夢虫のつくった商店街の歌が演奏されている。

NPO まちアート夢虫
半田晶子さん
<http://www5.ocn.ne.jp/~nocc/>

このまちって いいなと思える イベント

——まちアート夢虫が、「きらゆめ」に参加する際に重点を置いていることは何でしょうか？

半田 夢虫の企画活動によって、地域の人々、次代を担う子どもたちのふるさととしてまち（商店街）に誇りや愛着を持てるようにしていくこと、そのためにこのまちを私たちも来る人たちと一緒に楽しみ、知ることができるようなことを考えることです。また、このまちに来たどの人も交流できる場、参加の場をつくっていくこと、「きらゆめ」に来たことで、身近によりよい芸術やワークショップに触れることができ、生きていくことの楽しさや他では得られない元気がもてるようにすることです。

——「きらゆめ」スタートから10年間関わってきて、一番思い出に残っていることは何ですか？

半田 夢虫で創った商店街の歌を、毎回船

橋小の子どもたちが歌っていることです。できれば商店街の中でも録音して流してほしいですね。それと、商店街のお店めぐりで帽子屋さんや金物屋さん、下駄屋さん、ほか古いお店を訪問した企画の際に、店や商店街の歴史や商品などの話を店主の方に伺い、隠れたその店の魅力に触れることができたこと、一緒に企画活動した私たちやる側も参加した大人や子どもたちも商店街を発見し、好きになり、つながることができたことです。

——半田さんからご覧になって、「きらゆめ」の魅力は何ですか？

半田 まちや人々のことを考える方たちがいて、より良くしていくと一緒に活動できることです。その結果、ゆつくりですが、確実に次の一歩につながっています。来る人々にとっても、そうした姿勢が伝わる企画であり、「このまちっていいな」、「来てよかった」、「元氣になった」と思えるイベントだと思っています。

「きらゆめ」が、 “ふるさと”

NPO 法人コミュニティアート・ふなばし
理事長
下山浩一さん
<http://www.communityart.net>



障がいのある人も 無い人も当たり前 に参加している風景

——「きらゆめ」に参加していかがですか。
山本 NPO法人ちばMDエコネットが、「コミュニティカフェ「ひなたぼっこ」（船橋市本町）を作ったのは、障がいを持った人と地域の接点をつくるためです。けれど「ひなたぼっこ」に来てもらえるお客さまには限りがあります。私たちは、商店街、地域の住民の方々と出会う機会が欲しいと考えていました。まず、障がいを持った人も地域の住民であるということを知ってもらう。そして、さまざまな地域活動に障がいのある人も無い人も当たり前に参加している風景が当たり前になっている状態を作りたいと思っていました。

——「きらゆめ」の魅力は何でしょう。
山本 「きらゆめ」では、障がいがある人も無い人も、同じ「きらゆめを担う人」として参加しています。これは、すごいことです。障がいを持っている人だけが集まる福祉系イベントなどはたくさんあります。しかし、こうした場合は、福祉に興味がある人しか来ません。障がいを持った人が、地域で暮らしていくためには、他のチャネルも必要なのです。本町通り商店街があるエリアは、新住民がとても多くて、いわゆる「地縁」を確立している人が少ないのが特徴です。こうした中、10年間も続いている地域づくりイベントである「きらゆめ」の存在は、住民がまちに関わる非常に貴重な場になっていると思います。



NPO 法人ちば MD エコネット
事務局長
山本佳美さん
<http://mdeconet.jp/>

「ひなたぼっこ」スタッフを中心とする
「おひさまバンド」の演奏を終えて。

「きらゆめ」は、新しい「ふるさと」です。人は、どのような時に、まちに愛着を覚えるのでしょうか？
それは、その場所で、学び／働き／人を愛し／悲しみ／喜び／心と体を働かせる・・・
そう、思い出を重ねる時、人はそのまちに愛着を覚えるようです。
人に大切にされ、まちに育てられる。こんな体験をする場所を、私たちは「ふるさと」と呼びます。
「きらゆめ」は、10周年を迎え、次の20周年に向かって進みます。
私たちの祖先は、何も無い土地に作物を植え、焼け跡に家を建てて、楽しい時と苦しい時を重ね、「ふるさと」をつくってきました。2011年に起こった、東日本大震災、そして東京電力福島第一原子力発電所事故は、多くの被害者を出し、私たちに立ち直り難い試練を与えました。天災・大事故を前に、私たちはあまりにも無力でした。
しかし、私たち庶民は、常に奪われ、何も無い場所からスタートし、辛酸を舐めながら生活し、子どもを育て、「ふるさと」をつくり出してきました。人類が生まれてから今に至るまで、この活動が途切れたことはないのです。私たちの「ふるさと」づくりの取り組みは終わりません。
古今東西の仲間がそつしてきたように。「きらゆめ」においてのお客様、参加NPOの皆さま、そして船橋市本町通り商店街の皆さまに、心より感謝を捧げます。ありがとうございました。そして、これからもよろしく願っています！



中村屋帽子店にて今は亡き渡辺さん（右端）にお店の歴史について話を聞く山浦さん（左端）



白状します。

NHK秋田放送局
番組制作ディレクター
山浦彬仁さん

この場を借りて白状させて下さい。

10 年前、きらゆめが始まったころ高校生だった僕にとって船橋は単なる「乗り換えの駅」でした。毎日、船橋を歩いていながらも本町通りを全く知らなかったのです（!!!）。さらに白状させて下さい。今では転勤族で熊本→秋田と転々としています。人と話し、必ず聞かれるのは出身地。「どこの人？」尋ねられる度に、僕は生まれも育ちも違うのに「地元のような場所は船橋です」と応えています（!!!）。生粋船橋っ子この皆様ごめんなさい…。

でもなぜに僕は船橋を「地元のような場所」と言ってしまうのでしょうか。文章を書きながら自分で改めて考えることにします。

コミュニティアート・ふなばしに参加し、年2回ある「きらゆめ」を目標に「ふな PICO」発行や現代アーティスト・門脇篤さんのインスタレーション、お散歩演劇ポタライブなどプロジェクトの制作をして参りました。今振り返ればこれらの活動は全て、本町通りを舞台に繰り広げられた「大きな物語」を知り、「ひろば」に参加することは「みんなの物語」に参加していく事でした。本町界隈に暮らす人、行き交う人の悲喜交々はもちろん、西向き地藏や布団屋にマネキンが置かれた経緯…ビルの強い風や、秋に香る磯匂い…薄暗がりの路地、看板の後ろでひっそりと光る猫の目…全てのものに大切な物語があることを学ばせて頂きました。就職して以来、本町通り商店街を歩いていません。町は刻々

と変化し続けていると思います。しかし「きらゆめ」に向けて準備をさせて頂く中で伺った、「ふとんの木下」さんのマネキンの事も、「中村屋帽子店」のご主人・渡辺さんが大切にしていたサイコロのことも、私の中の物語として克明に刻まれています。

転勤族となり、民俗芸能の宝庫秋田で暮らすようになってから、故郷とは「物語を刻んだ場所」だと強く感じるようになりました。だから船橋は地元なんです。

これからは「船橋が故郷」とはつきり言っても良いですか？文章を書きながら浮かんでくるのは「きらゆめ」でお世話になった皆さんの顔と声。ああ、秋田の美味しいお土産をもって早く帰りたい。

わが故郷「きらきら夢ひろば」10 周年おめでとうございます！

『絶対的な体験』の前には優越などないというのであれば、何もかもがそうではないか。芸術のみならず社会のあらゆることに意味がなくなくなるであろう、そもそも、れっきしてそれはあるではないか、と言われるかもしれない。しかし私はそうした評価の仕方そのものが、その人、その技、その場との関係においてはおぼろげに成り立つものであり、そこにあるのは極限すれば優劣ではなく、関係だけなのではないかと震災後は確信を持って考えるようになりました。震災を経て、そうしたものに支えられない社会、顔のみにないものが流通する社会は空しいと、確信を持って語れるようになったのは、私だけではないでしょう。

私たちが持っている「絶対的な体験」を表現したり共有したりするということ、それを引き出し、つないでいくこと。フィクションとしての芸術や社会を磨いていくのではなく、唯一固有のドキュメンタリーとしての生を紡いでいくこと。それこそが震災後を生きる私たちが得たことであり、「きらゆめ」がこの10年間続けてきたことに他なりません。

しかし、それは震災体験だけなのだろうか。私たちがみなそれぞれを生きているという、それ自体が本来「絶対的な体験」なのではないでしょうか。私が震災以前からアート、特に「ミニシアター」というジャンルで取り組みたいと考えてきたことの根幹はまさにそこにあり、その最も優れた例を「きらゆめ」に見ることが出来ます。「きらゆめ」が紡ぐ物語は、それぞれ非常にプライベートなものに端を発しています。しかしそれが大量消費やコモディシャリズムに対してこれほどまでに堂々と面白いことに、私は感嘆を禁じ得ません。

『誰が一番ということ、ないんだよね』という言葉を昨年、いろいろなところでいろいろな人から聞きました。運動会の話ではありませんが、震災についての話です。誰と比べることもできない、あるいは比べることが本質的に無意味なそうした体験は、「絶対的な体験」とも言うべきものです。それは私が住む東北だけでなく、この体験はここ船橋でも共有されていることを、震災直後の昨年5月に行われた「きらゆめ」で確認することができました。



本町通りのセレクトアイテムを販売する「HONCHO セレクトショップ」の一日店長をする蔵本さん

商店街は地域社会のプラットフォーム

蔵本裕子さん



「きらゆめ」夢ひろば」10 周年、おめでとうございます。私は大学生のときから「きらゆめ」事務局のお手伝いをさせて頂いてきたなかから、「きらゆめ」をテーマに卒業論文・修士論文を書かせていただきました。その取材のためにいろいろな資料を調べ、たくさんの方にお話を伺うなかで感じたことは、本町通り商店街は「地域社会のプラットフォーム」になるのではないかと、ということです。本町通り商店街は、何十年も前から、船橋市のなかでも中心的な存在として発展してきた商店街です。商店街としての機能だけではなく、町内会や商工会議所 PTA などでも、その担い手として地域社会を盛り上げてきたのが、本町通り商店街の店主のみなさんでした。船橋市の発展とともに本町通り商店街にもマンションが増え、そこに暮らす新しい市民の方々も増えています。こうした現在だからこそ、古くから暮らしている人も新しく住み始めた人も、老いも若きもが気軽に集まることのできる場所として、本町通り商店街は地域社会のプラットフォームになりえるのではないかと思います。そしてそれを実現するため、地域社会でさまざまな活動をしている NPO のみなさんと、これまで地域社会を担っていたつながりをもつ店主のみなさんが一緒に作り上げていくきらゆめという仕組みの重要性は、今後さらに増していくのではないかと思います。

フィクションからドキュメンタリーへ



仙台在住の現代アーティスト 門脇篤さん

門脇さんが被災地を含めた各地で展開しているプラダンワークショップを生み出したのも「きらゆめ」だ。

